

表未来の文化を担う人の育成

副題	～自立と共生の力をもった子どもの育成のための伝え合う力の充実～
学校名	京都教育大学附属桃山小学校
所在地	〒612-0072 京都府京都市伏見区桃山筒井伊賀東町46
ホームページ アドレス	http://www.kyokyo-u.ac.jp/MOMOSHO/index.html

1. はじめに

現代は知識基盤社会と言われ、グローバル化が進んでいる。社会の情勢はめまぐるしく変化し、情報や技術も日々更新されていく。今の子どもを取り巻く社会を見ても、少子化・核家族化が進み、地域行事への参加意識も薄くコミュニティが減少してきている。特定の人との交わりはあるが、様々な人と交わる機会が極端に減少している。また、家庭のテレビ保有台数の増加とともに、子どもがテレビを見て過ごす時間も増えている。その上、インターネットや携帯電話が普及し、子どもの生活の中にも当然のように入り込んできているのが現状である。

このような社会の中、平成12年に「e-japan構想」、平成21年に「スクールニューディール構想」が打ち出され、学校現場でのICT機器の環境整備が急速に進められた。本校においても校内LANをはじめ様々な整備を行った。これまでも、実物投影機などを活用した教育を行ってきたが、今回の整備により、さらにICT機器を活用した教育活動が可能となった。

2. 研究の目的

子どもが得ている情報は、一方的なものであることが多く、必要以上に氾濫していて、その量も膨大である。現代を生きる子どもの中には、自分で情報を見つけ出せないばかりか、情報を鵜呑みにし、その信憑性すら疑おうともしない子も多い。また情報過多の社会では、その情報の真偽に対する判断は容易ではなくなっている。

また、様々なメディアの発達により、情報の広がる速度は、恐ろしいほど速い。日々大量の情報のさらされている現代人にとって、主体的に情報を取捨選択し、再構成し、責任をもち発信していく力が必要である。このような社会を子どもは生き抜いていかなければならない。さらには、日本という範囲だけでなく、世界で通用する人の育成が求められている。

これまでに本校は、『「自立」と「共生」の力を持った子どもの育成』をめざし、言葉で伝え合う力の充実を図り研究を進めてきた。これに加え、視覚や聴覚に直接働きかけたり、体験が困難な場合にはバーチャルな体験を行ったりすることで、子どもの得る情報の量は大幅に増える。その中で自分に必要な質の高い情報を取捨選択し活用することで、多面的な見方の思考活動を促すことができる。思考活動が充足されれば、人に伝えたいくなる。そして、情報を伝達する際には、プレゼンテーション能力が必要となってくる。この活動は「ひと」と「ひと」が高め合う活動であり、思考が広がり深まる活動である。

そして、この研究において「言葉で伝え合う力」の充実を図り、指導者も子どもも、

鉛筆やノートのように，ICT機器を活用する姿

情報やメディアを選択し，活用する姿

が見られるようにしたいと考えた。実践は本学だけでなく，他大学や社会教育施設などのいろいろな機関とも連携しながら取り組んでいく。

また，教育の情報化は，子どもや本校の教職員だけでなく，これからの教育を担う指導者にも広げる。年間100名超の教育実習生がやって来る附属学校としては，これから教職を目指す学生のICT活用能力を育成していくことも，大きな課題になっている。目の前の子どもに何が必要か，また教育を担うものとして自分たちに何が必要かを考え，取り組んでいく。

3．研究の方法

本校の研究である創造性教育は，昭和40年から始まる。半世紀近くたった今もその理念を根幹とし，「自立」と「共生」の力を持った子どもの育成を目的に取り組んでいる。平成10年からは，京都教育大学附属桃山地区学校園としての幼小中の3校園連携研究を進めている。これまでの創造性教育のよさを継承し，教育の情報化に伴い導入されたICT機器の有効性を検証しつつ研究を進めるため，以下のような研究テーマを設定した。

研究テーマ：未来の文化を担う人の育成

～自立と共生の力をもった子どもの育成のための伝え合う力の充実～

この研究テーマのもと，「人間力＝未来の文化をになう力」と仮に定義し，小学校段階においては「自立」と「共生」の力を持った子どもの育成が必要であると考え研究を出発した。この段階において，子どもはもちろんのこと指導者も電子黒板などの電子機器を十分につかえる段階ではなかったため，年次ごとに目標を小ステップに区切り，取り組むこととした。

1年次：「人間力」とは何かとすることを再構築することとICTの可能性を探る

2年次：「人間力」向上のためのカリキュラム化を踏まえた実践を行う

これらのことを深めるために，次の5本の柱を立てて研究を進めることとした。

子どもを対象とした研究項目	指導者を対象とした研究項目
基本的な生活習慣の確立	デジタル環境及び用具の整備と指導者のスキルアップ
異年齢交流の充実	情報の蓄積と再利用システムの構築
メディアの特性を生かした利活用	

4．研究の内容

(1) 人間力の定義

『未来の文化を担う人』を育成するためには，小学校段階では何が必要かということ考えた。人間は，人との関わりの中で，大きくなっていく。関わりの中で出会うものに対して，どう感じ，どう考えたのかということ，自分の中で，そして集団の中で吟味すること，そしてその課程が大切なのである。そこで，研究のサブテーマを「自立と共生の力をもった子どもの育成のための伝え合う力の充実」と設定した。

「人間力」とは何かということ定義するために，まず「人間力」の持っている本質的な意味について考えた。様々な文献を調べてみても「人間力」そのものを定義しているものは少ない。またいくつか見つけたものは，全て大人の人間力についてであった。私たちの考える教育の原点は子どもである。そこで，「人間力」を定義する上で，やはり「子どもの視点」から発想するべきであると考えた。

(2) 5本柱の実践

基本的な生活習慣の確立

機器を効果的に使い、視覚的に自分たちの生活や学校全体の様子を見つめ、再考する場を設定する。その成果を改めて観ることで自己肯定感が向上するのではないかと考える。

異年齢交流の充実

たてわり活動や幼小中の連携研究もベースを生かし、ともに学び合う中で学習への意欲や自己肯定感の向上につながるICT機器を活用していく方法を模索していく。

メディアの特性を生かした活用

機器導入以前のアナログ的な授業のよさは継続し、導入することで見えてくる新しい授業のスタイルやその効果を研究することで、「アナログ」と「デジタル」を融合し、有効的に活用する。

デジタル環境及び用具の整備と指導者のスキルアップ

自然と子どもたちが学びたくなるような環境を整え、主体的に機器の活用できるようにする。また、定期的な研修を持ち、操作技能や授業に生かせる活用方法を指導者間で共有していく。

情報の蓄積と再利用システムの構築

ICT機器を活用した授業の活用場面を共有するだけでなく、データそのものをポートフォリオ的に蓄積し、別の単元・別の場面でも再活用していけるよう、データベース化する。

5. 研究の経過

(1) 人間力の定義

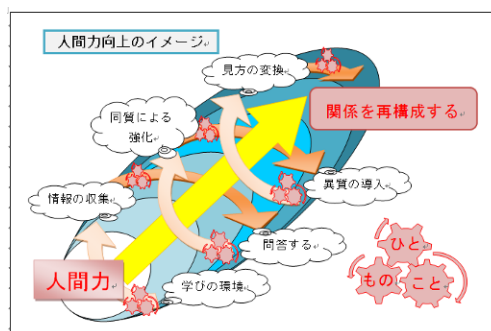
創造性教育研究の変遷を見返し、「人間力」に関する文献や資料を読むことを通して「子どもにとって必要な『人間力』は何なのか」という議論することに前半の1年を費やした。「人間力」は、考えれば考えるほど深い言葉である。そして、たどり着いたのは、次のようなことである。

子どもは、限りない可能性を持っている。その子どもが、「未来の大人」になるのである。そこで、今、目の前にいる子どもに「何が必要か」として「どんな力を培っておくべきか」ということを考えた。そして、これまで本校が教育の中で大事にしてきたものが重要であるということが再認識できた。これは、時が変わり環境が変わっても、変わらないものである。そこで、小学校段階における「人間力」を次のように定義した。

人間力 = ものごとの本質にせまっていく力

ここでいう『ものごと』とは、「ひと・もの・こと」である。本校がこれまでに行ってきた創造性教育の視点から考えると、子どもは、自分と『ものごと』とのこれまでの関係を問い直し、新たな関係を築くことを繰り返しながら大きくなっていく。つまり、『ものごと』との関係を再構成し大きくなっていくのである。

しかしながら、『ものごと』の本質にせまっていくことは容易ではない。そこで、右図のように『ものごと』の本質にせまっていくための方法を身に付け、『ものごと』の本質にせまっていくことの楽しさや必要感、切実感をもって、子ども自身が行動することが重要なのではないかと考えた。



(2) 5本柱の実践

基本的な生活習慣の確立

ICT機器には、情報を切り取り再現できる良さがある。この点を生かし、子どもたちは自らその現状をデジタルカメラで記録し、他の児童への発信を行うべく活動を始めた。視覚的に自分たちの生活や学校全体の様子を見つめなおす機会を持ち、考えを深める場となった。

異年齢交流の充実

異学年で学習する場を設定することで、自分たちの学習の様子を映像として残し、それをもとに学びあったり、教えあったり、助けあったりする姿が見られた。上の学年は分かりやすく伝えようという姿を、下の学年は学習の見通しをもてる姿を見ることができた。

メディアの特性を生かした利活用

ICT機器を導入する以前にも授業は行われてきており、子どもは育っていた。これまでの理念や授業のよさを継承して研究していくと共に、ICT機器導入による新しい授業のスタイルやその効果を同時に研究することで、「アナログ」と「デジタル」を融合し、子どもたちの更なる育ちやその変化を見つめるために授業実践を重ねた。その経過の中で、活用の意図を明確にするために柴田

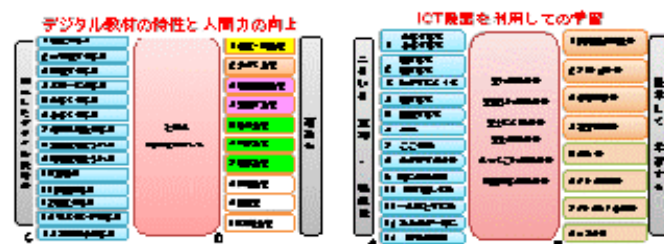
1. 基本的な生活習慣の確立



2. 異年齢交流の充実



3. メディアの特性を生かした利活用



功ら(2008)の「教育用理科コンテンツ活用に関する研究」を参考に「いつ」「どこで」「誰に」「何のために」使うのかという活用表を作成するに至った。大切なことは、場面ごとに最も適切と思われる方法を選択し、活用できる力である。

デジタル環境及び用具の整備と指導者のスキルアップ

機器活用において必要なことは、自由に使える環境を整えるとともに、保管方法や使用状況がわかるようにした。

また、機器の操作技能をはじめ、指導者側のスキルアップのために、定期的な研修を持ち、授業実践に活かせる機器の活用方法を指導者間で共有できるようにした。

情報のポートフォリオ的蓄積と再利用システムの構築

作成した情報が増えていくと、作成したものが一度きりの使用に終わってしまうことも多く見られた。そこで、授業の実践をポートフォリオ的に蓄積し、再活用できるように、ICTデータベースシートを作成し、データベース化を行った。これをもとにボトムアップ的なカリキュラムの作成に生かせるようにした。これをもとに、人間力向上のためのカリキュラムを作成した。このカリキュラムは、固定のものではなく、そのつきたい力を明確にすることにより、指導者の意図も生かせるように入れ替え可能のものとした。

4. デジタル環境の整備及びスキルアップ



5. 情報の再利用可能なシステムの構築



学年	領域	単元	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	国語	国語												
1	算数	算数												
1	理科	理科												
1	社会	社会												
1	総合	総合												
1	英語	英語												
1	音楽	音楽												
1	美術	美術												
1	体育	体育												
1	保健	保健												
1	道徳	道徳												
1	外国語	外国語												
1	キャリア教育	キャリア教育												
1	ICT教育	ICT教育												

6. 研究の成果と今後の課題

「ICT 機器の前に人間！」言われてみれば当たり前ののだが、大切なことである。機器は、やはり道具である。必要な時に必要なところで有効的に ICT 機器が使われるようになるにつれて、機器の使用が見えなくなってきた。その中で、次の3つのことが明らかになった。

子どもはすごい！ それぞれのよさを生かす！ ICT 機器は触媒！

その中で、電子黒板の利活用に限ってみても

- ・説明のポイントや課題が大きく提示され、児童が視点を集中することができる。
- ・肉眼では見えにくいものを見えるようにすることができる。
- ・教科の学習においても思考の道筋を見えるものにして効果的に説明することができる。
- ・指示、説明、データ収集等において機能的であるので、時間の節約ができる。
- ・これまでの学びの過程や結果を容易に振り返ることができる。
- ・プレゼンテーションツールとして聴く者の顔を見ながら話すことができる。

等々の多くの学習効果を向上させる具体例を見ることができた。

日常の学習でも、子ども一人ひとりが発見したことをクラスで交流する場面はよく見られる。そんな時に自分の伝えたいことを写真や動画を使って紹介できたなら、その現場を実際に知らない者にとっても、発表者の思いに近づいて共感的に捉えたり、自分の問題として考えたりしやすくなる。そして、こういった「寄り添う」空気が流れることが、クラス全体の学ぶ意欲が高まることにつながる。自分の思いが相手に伝わる、相手の言うことが理解できる実感は、自己肯定感を育み、クラスの共同体意識を高める基盤となるものである。このようなことも ICT 機器が手助けすることができる。まさに「ICT 機器は、触媒！」なのである。

「自立し共生できる力」も「生きる力」も「気付き考え行動する力」も言うなれば全て「人間力」と言うことができる。「人間力」を定義することに随分と時間を費やしたが、人間が本来持つ力や理想実現に向けて高めることが望まれる力を焦点化し、その向上のための方策と可能性が具現化された姿を明らかにしていくことが必要だと感じた。その意味で本校の研究においては、人間力の育成 ものごとの本質に迫っていくアプローチ 自立共生できる力の具体化 例えば『自己肯定感と共同体意識』という一つの道筋に沿って、子どもが育つ過程を見取りつつ、その向上のための試行を重ねてきた。

今後の研究につなげていくために次のようなことを大切にしていきたい。

子どもの成長を語る時、数値はもとより、客観的に目に見える証拠をもって示すことは難しい。それを少しでも分析的に見ていくために、学習の場で活用した ICT 機器の特性と「人間力」を構成すると考えられる様々な力を関連づけて指導の効果性を確かめることを重視した。それが前述した「一つの道筋」における『 と 』にあたる場所である。様々な授業実践の中では、ここに『表現力と聴く力』や『発想力と批判的思考』というようにいくつかの重要な観点が入る。そして、ICT 活用授業プランデータベースシートと関連させて、項目毎に指導のポイントを整理することで、カリキュラム作成に取り組んだ。実際のところ「人間力育成のためのカリキュラム」と呼ぶには不十分な点が多く試行段階であると言える。今後検証を含めて質的な改善を図り、一般的な意味でのカリキュラムとして働くものにしていくことが重要な課題である。

クラスの中で自分を表出することに苦手意識を持っていたが、コンピュータ操作に長けているところを友達に認められ、授業中に頼りにされることが増えたのがきっかけに着実に積極性を高めていったA君。言葉による説明が不十分でまわりから理解されにくかったが、友達の話をも共感的に聴くことの意義に気づき、認められる実感を得ることができたBさん。クラスの中で起こる、このような子ども一人ひとりの小さな物語を大切にしたいと思う。子どもの持つ人間力も大切であるが、それらの子どもの変容に気づき、しっかり認

めるのも重要な教師力である。様々なきっかけで日々成長する子どもを支える教師力，保護者力，総じて学校力を再認識して，目標を明確にし，達成に向けてのステップを具体化していく作業に今後とも取り組みたいと考える。

7. おわりに

パナソニック教育財団の特別研究指定を受け，全校をあげて取り組んできました。「人間力」という非常に難しい研究テーマではありましたが，本校がずっと教育理念として継承してきた「創造性教育」が根底になると確信し，「人間力」という視点から本校の教育理念について，全教員が共通理解し，学び直してきました。教員にとっても子どもにとっても，今や電子黒板や ICT 機器は，日常にあるもので自然に取捨選択しながら使えるものになってきました。

しかし，最初から今のような状態だったのではなく，中にはパソコンが自由に使いこなせない教員もいました。このような中，高い教育技術を持つ経験豊かな教員と機器操作に堪能な若手の教員が協力して授業を作り上げていく姿が多く見られました。全教職員の努力と協力があったからこそ，この研究を進めることができたと感じています。

最後になりましたが，この研究を進めていくことができたのは，赤堀先生，浅井先生，富永先生そしてパナソニック教育財団の方々のご指導と多大なご協力ご支援の賜物と深く感謝申し上げます。今後も，形は少し変わりますが，この研究を深化発展させて行きたいと考えています。

主な参考文献

- ・赤堀侃司（2004）「情報モラルを鍛える」 ぎょうせい
- ・市川伸一（2004）「学ぶ意欲とスキルを育てる いま求められる学力向上策」 明治図書
- ・木村 明憲（2010）ICTを活用した学力向上のための方策 京都市総合教育センター
- ・「人間力戦略研究会」（2003）「人間力戦略研究会」人間力戦略会議
- ・柴田功 瀧田伸子（2008）「教育用理科コンテンツ活用に関する研究（神奈川県立総合教育センター『研究集録』第27集）」神奈川県立総合教育センター
- ・中川一史（2008）「メディアで創造する力を育む 確かな学力から豊かな学力へ」ぎょうせい
- ・文部科学省（2007）ICTを活用した指導の効果の調査結果について
- ・文部科学省（2008）小学校学習指導要領
- ・文部科学省（2011）教育の情報化に関する手引